令和7年度・市民所有の文化財展

「大野市文化財保存活用地域計画」（文化庁認定）掲載事業

藩主土井家菩提寺

善導寺の寺宝

普段、非公開となっている市民所有の文化財を特別に公開します。

今回は、藩主土井家菩提寺・善導寺（大野市錦町）の寺宝を展示します。



善導寺 知恩院末 越前國大野郡 光明山悟眞院善導寺
鏡譽大阿卜云僧 永祿元戊午年草創 學問檀林（「蓮門精舎旧詞」(部分)）



紙本 阿弥陀三尊名号
（増上寺 36 世・祐天筆）

【会　期】 11月　1日（土曜日）～
11月30日（日曜日）
（期間中無休）

【時　間】 午前9時から午後4時まで
（日曜・祝日は午後5時まで）

【入館料】 一般400円、中学生以下　無料

【会　場】 大野市歴史博物館
住所 ： 大野市天神町2－4
電話 ： 0779－65－5520

善導寺見学会

善導寺に残る「藩主御成（おな）りの間」（藩主の休憩室）や庭園、本尊（県指定文化財）、座敷の襖絵（ふすまえ）などを学芸員が解説します。

【日　時】 11月22日（土）
午後1時 30 分～午後2時 30 分
【集　合】 善導寺駐車場（大野市錦町4－11）
【参加費】 無料
【申込み】 11月20日（木） 午後4時
【問合せ】 大野市歴史博物館（0779-65-5590）

結の故郷 越前おおの
大野市は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

【大野市教育理念】明倫の心を重んじ 育てよう 大野人

展示資料

徳誉祐全筆 利剣名号・宝珠名号　（時代　江戸時代） 名号とは「南無阿弥陀仏」のことで、浄土宗は、名号を唱えることで阿弥陀仏を深く信仰することを示し、死後の救済を求めてきました。 次第に、名号そのものに救済の力（功徳）があると考えられ、それをさまざまな書体で書き表してきました。「利剣（するどい剣）」は名号が煩悩を断ち切る、「宝珠（宝の珠）」は名号が煩悩をなくし清浄にすることを意味します。浄土宗では百万遍念仏（念仏を 100 万回称える行事）の本尊とされたことから、金箔で表現されています。 この名号を書いた祐全は、祐天寺（東京都目黒区）の６世で、中興上人と称され、その木像が祐天寺本堂内の本尊・祐天上人像の左脇に安置されています。なお、祐全の弟子・祐東が寛政９年（1797）に善導寺の１４世住職になりました。
大誉鏡山筆 六字名号　（時代　室町時代） 善導寺は、永禄元年（1558）、筑後善導寺（福岡県久留米市）から布教のため大野を訪れた大誉鏡山によって野口村（今の大野市役所辺り）に建立されました。 筑後善導寺を拠点とする「鎮西派」（鎮西＝九州）は、浄土宗が法然没後に分裂したのち、浄土宗の正流と位置付けられました。現在、「浄土宗」というと、この鎮西派（白旗流）を指し、知恩院（京都市東山区）を総本山とするのに対し、この筑後善導寺や増上寺（東京都港区）などを大本山としています。 なお、元禄・享保年間（1688～1736）に全国の浄土宗寺院をまとめた『蓮門精舎旧詞』には、善導寺の創建者の名を「鏡誉大阿」としています。
二河白道図　（時代　不詳） 昨年（令和６年）は、法然が浄土宗を開いて８５０年という記念すべき年でしたが、その法然に多大なる影響を与え、かつ法然が師匠と仰いだのが中国（唐）の善導（613～681）です。 「二河白道図」は善導の著書『観無量寿経疏』（『観無量寿経』の注釈書）の比喩を図化したもので、東岸は娑婆世界（この世）、西岸は極楽浄土を表し、東から西に向かって一本の白道がつながっています。その道は細く、進む方向の右手は荒れ狂う水の河、左は燃え盛る火の河です。道の真ん中あたりで、進むべきか戻るべきかまさに進退極まった時に、後ろからは釈迦が「行け」と励まし、前からは阿弥陀仏の「来い」という声が聞こえ、無事、阿弥陀仏の極楽浄土に行くことができた、という例え話を絵画化したものです。
徳本筆 六字名号　（時代　江戸時代） 徳本とは、宝暦８年（1758）に現在の和歌山県日高町で生まれた浄土僧で、念仏の教えと実践を大切にしました。布教活動は近畿、東海、関東、中部、北陸などに及び、民衆から大名まで広く崇敬を集めました。

徳本の書体は「徳本文字」と通称される独特な形で、丸みを帯びて終筆が跳ね上がることから縁起が良いとされました。「〇」と「＋」を組み合わせたような花押は「鬼」を分解させたもので、心の鬼を退治することを表しているといわれています。

『徳本行者全集』（昭和 50～55 年）には、徳本の弟子・徳正が善導寺の住職になったと記されています。徳正は不明であり、善導寺の歴代にもその名は確認できませんが、善導寺に徳本自筆の名号や徳本の木像が伝わることから、深いつながりがあったことと思われます。

徳本筆 六字名号　（時代　江戸時代）

善導寺墓地に建つ「無縁墓」（お墓を管理する家族や親戚などが長い期間いないお墓）は、文政２年（1819）、善導寺１６世・祖英が建てました。この碑面に彫られた「南無阿弥陀仏」は、当資料の文字を写したものです。碑文に当資料を選んだ理由は不明ですが、善導寺にはこの他にも、徳本自筆の名号（計 3 幅）や木造が伝わります。

無縁墓は徳本死没の翌年に建てられています。『徳本行者全集』（昭和 50～55 年）で、徳本の弟子で、善導寺の住職になったと紹介される「徳正」とは、この祖英のことを指すのかもしれません。

徳本	祖英
・1794 年　全国行脚を開始。民衆の支持を集める。 ・1803 年　法然院（京都府）で剃髪。「流行神」と称される。 ・1814 年　一行院（東京都）の住職になる。 ・1818 年　一行院で没。	・1788 年　善導寺 12 世の弟子になり、剃髪。 ・1796 年　増上寺（東京都）で修行。つづき、福徳寺（神戸市）の住職になる。 ・1812 年　善導寺住職になる。 ・1819 年　無縁墓を建てる

徳本筆 六字名号　（時代　江戸時代）

当資料は他の２軸と異なり、名号が１６枚の蓮華に乗るように書かれています。「１６」は、古代インドで完成を意味する「４」をさらに４倍した聖なる数字として、仏教では「十六観」や「十六羅漢」、『十六門記』（『法然上人伝』の別名）などに登場する数字です。

祐天筆 三尊名号　（時代　江戸時代）

阿弥陀三尊（阿弥陀仏、観世音菩薩、勢至菩薩）の名号が大書されています。『観

無量寿経』によれば、観世音菩薩は阿弥陀仏の「慈悲」、勢至菩薩は同じく「智慧」の化身とされます。

祐天とは、寛永１４年（1637）に現在の福島県いわき市で生まれた浄土僧です。隠遁した念仏修行を好みましたが、元禄１２年（1699）、桂昌院（５代将軍・徳川綱吉の生母）の帰依を得ました。これを契機に幕府から厚遇を受け、６代将軍・家宣によって増上寺（東京都港区）３６世に就くと、家宣の護持僧のような立場になりました。

善導寺と関係が深い祐天寺（東京都目黒区）は、祐天の入寂（僧侶が亡くなること）のために弟子が整備した寺院で、祐天像と阿弥陀仏坐像を本尊としています。

伝 雪舟筆 達磨　（時代　室町時代）

雪舟とは、応永２７年（1420）に現在の岡山県総社市に生まれた画僧です。中国（明）に渡り、李在（明の宮廷画家）から中国の画法を学びました。江戸時代、画壇の中心勢力だった狩野派が雪舟を師としたことから大名が競って買い求め、神格化が進みました。

達磨はインド人仏教僧で、中国禅宗の開祖です。坐禅によって真理を求める禅宗と、阿弥陀仏の他力によって往生を目指す浄土宗は、信仰の方向性が違うという説明が多く見受けられます。しかし、中国で浄土思想を確立させ、法然に大きな影響を与えた善導は、『観無量寿経疏』（『観無量寿経』の注釈書）で坐禅法を示しましたし、日本で浄土教の基礎を創った源信も、『往生要集』で坐禅による精神統一の中で仏を観ることを説いています。

土井利貞筆 和歌　（時代　江戸時代）

土井利貞は土井大野藩４代藩主で、寛保元年（1741）に生まれました。

料紙の上下にある雲のような装飾は、藍や紫に染めた雁皮紙を叩きほぐして漉きかける「打曇」という技法で、和歌や漢詩など文芸用によく用いられました。

歌は、善導寺本尊の功徳がありがたいため、花を供えるという意味です。

光明山　にてほとけ
則 はな奉るとて
　　みなもとの利貞
かけたのむ のりの
ひかりそ あきらけき
みよのほとけに はな た
　　てまつる

伝 雪舟筆 文殊菩薩　（時代　室町時代）

雪舟とは、応永２７年（1420）に現在の岡山県総社市に生まれた画僧です。中国（明）に渡り、画法を学びました。江戸時代、画壇の中心勢力だった狩野派が雪舟を

師としたことから大名が競って求め、神格化が進みました。

文殊菩薩は『般若経』などで「智慧」（悟りへ到るための重要な要素）を司る菩薩とされ、「智恵・学問の仏」として広く知られていますが、古くは貧者を救済する菩薩として信仰されていました。髪をまとめず、手足の爪は伸び、質素な竹杖に身を委ねる文殊菩薩の姿は、福業（善い行い）を実践しようとする者の前には貧者の姿で現れるとする『文殊師利般涅槃経』の影響が考えられます。

法然は『念仏大意』の中で、「凡夫（仏教の理解に乏しい者）が浄土へ往生できる方法は念仏しかない」と説く文殊菩薩を紹介しています。

土井利忠筆 菊花図幅　（時代　江戸時代（天保４年（1833））　（指定　市指定文化財）

土井利忠は土井大野藩７代藩主で、文化８年（1811）に生まれました。天保１３年（1842）から取り組んだ藩政改革によって藩の窮地を救ったことから、柳廼社で祭神として祀られています。

描かれているのはシジュウカラと菊、葉鶏頭です。シジュウカラは人家の近くに生息し、声もよく通ることから、古くから親しまれて来た野鳥です。菊は長寿を象徴する植物として人気がありました。葉鶏頭は、雁が飛んでくるころに葉が赤く色づくことから「雁来紅」とも呼ばれ、秋を愛でる植物として人気がありました。

一幅に、晩秋（陰暦９月）の美しさの中に小鳥が遊ぶ「平和」をバランスよく描き上げており、利忠が絵に込めた想いが伝わります。

花鳥児童遊戯之画　（時代　江戸時代）

作者は不明ですが、善導寺では大野藩主土井氏の作と伝えています。

画面は縦に三部で構成されており、上から「鶴と芍薬」「遊児」「雀と菊」が配されており、背景に竹と梅らしき樹木が描かれています。

左の児童は白い布で目を隠し、右の児童たちは手を広げた男児を先頭に一列に並んでおり、目隠し鬼の一種で遊んでいるようです。袖口や帯など至るところに「赤」が見えますが、魔除けや厄除けを意味しており、子どもの健やかな成長を願う色です。

平和に遊びに興じる児童を囲み守るように「鶴＝長寿」「芍薬＝富貴」「雀＝豊穣」「菊＝長寿」が描かれ、次世代への吉祥の願いが込められています。

赤達磨　（時代　江戸中期）

「馬東」が写したと記されますが、詳細は不明です。

善導寺では馬東を青木馬東（江戸中期）と伝えています。青木馬東の作品は少なく詳細は不明ですが、他で皆川淇園の撰文になる作品を残しています。

近年、「仿寒巖 馬東」の銘で、当画と同じ落款を持つ絵画作品がネットオークションに出品されました。外題で「馬東とは、毛馬村（大阪府大阪市都島区毛馬町）の東で生まれた与謝蕪村（1716～1784）のこと」としていますが、当画に関していえば、俳画の創始者でもある蕪村の作風とは、少し趣きが異なるように見受けられます。

達磨を創始とする中国禅は浄土を思い描くための精神統一方法として、善導や源信によって浄土教にも取り入れられました。

寒山拾得図　（時代　大正時代）

寒山・拾得は２人とも不明な点は多いですが、中国・唐時代の初め（６００年代）の詩僧といわれています。

寒山と拾得は中国天台宗の中心寺院・天台山国清寺の禅僧・豊干によって引き合わされ、以後、行動を共にしました。ともに奇行が伝えられており、国清寺に出入りして残飯を食べ、奇声を発し、時には詩を詠みながら悠々と廊下を歩きました。僧たちが注意すると手を打ち鳴らし、大笑いして立ち去ったと伝えられます。一方で、仏教の哲理には深く通じていたともいわれています。

無欲であったことから、寒山を文殊菩薩、拾得を普賢菩薩に見立てることがあり、江戸時代の浄土僧・学信（1722～1789）の伝記をまとめた『学信和尚行状記』でも、豊干の言葉としてこの説が紹介されています。

観照院筆 和歌　（時代　江戸時代）

観照院は、土井大野藩２代藩主・土井利知（1674～1745）の側室で、３代藩主・利寛の生母となった観性院と同一人物と思われます。

生きるうちに重ねた罪や穢れが、善導寺によって清められる喜びを詠んでいます。

水から年月 しのふもの
は 時々のいろは うつりとる
かたしけなく 悦 かくハにあるなり
観照院

この世にて
つもりしちりを
はらいすて
墨の衣　に
身をまかせつつ

土井利治筆 阿弥陀経　（時代　江戸時代（正徳５年５月２５日））

土井利治は土井大野藩２代藩主で、延宝２年（1674）に生まれました。元文５年（1740）、第９代将軍・徳川家重の嫡男が元服して家治（のちの第１０代将軍）と名乗ったため、「治」の字が重なることを避けて「利知」と改名しました。この奉納はそれ以前に行なわれています。

阿弥陀経は『無量寿経』『観無量寿経』とともに法然が定めた「浄土三部経」（浄土宗の教え（教義）の根本）のひとつで、阿弥陀仏の実在や極楽浄土の様子、往生の方法などが書かれています。

巻末には、この年が土井大野藩初代藩主・土井利房の３３回忌に当たることから、

祖父に当たる土井利勝（幕府初代大老）ら５人の戒名も連ねて、その菩提を弔うために奉納したと書かれています。

祐天筆 六字名号　（時代　江戸時代）

浄土宗は、阿弥陀仏の力によって極楽浄土に往生することを教えの中心としています。『阿弥陀経』のなかで、法蔵菩薩（のちに悟りを開いて阿弥陀仏となる）が「もし、人々が往生を願ったにもかかわらず、極楽浄土に往生が出来ないのであれば、私（法蔵菩薩）は阿弥陀仏にはならない」と誓いを立てました。結果、法蔵菩薩は阿弥陀仏となっているので、「願えば皆、極楽浄土に往生できる」ということになります。この願う方法が「南無阿弥陀仏」の六字を唱えることで、浄土宗など浄土系の宗派（浄土教）で大切にされてきました。

祐天寺（東京都目黒区）６世・祐全による裏書によれば、善導寺７世・円随は、増上寺３６世であり祐天寺開山の祐天の随従（付き従う者）であると書かれており、早い段階で善導寺と祐天寺の交流があったことを示します。

聖阿筆 六字名号　（時代　江戸時代）

聖阿とは、明和４年（1767）に現在の奈良県香芝市で生まれた浄土僧です。知恩院（浄土宗総本山、京都市東山区）や伝通院（徳川家の菩提寺、東京都文京区）で修行したのち、清浄華院（大本山、京都市上京区）で徳本に師事しました。鹿ヶ谷法然院（京都市左京区）の住職を経て、文化４年（1807）に當麻寺奥院の第４１代住職になると、庫裏の再建など奥院の復興に尽力しました。

當麻寺の本尊・當麻曼陀羅は、唐の高僧・善導による『観無量寿経疏』（『観無量寿経』の注釈書）をもとに極楽浄土の様子を描いたもので、浄土宗にとって大変重要な資料です。その４分の１の縮尺版が善導寺に収められていますが（文政８年（1825）奉納）、善導寺と當麻寺に直接のかかわりはなく、なぜ聖阿筆の名号が善導寺に伝わったのかは不明です。

土井家旧蔵 煙草盆　（時代　江戸時代）

煙草盆とは、喫煙に必要な道具をまとめたものです。日本には桃山時代に煙草が伝わり、江戸初期に、それまでの香盆（茶事で使う香炉など香道具をまとめたもの）を転用して煙草盆が生まれたといわれています。

この煙草盆は、外側は拭き漆（木地に透けた生漆を塗っては布で拭き取る作業を繰り返し、木目を生かす技法）、内側は黒漆で落ち着いた仕上げになっていますが、四隅に継いだ跡が見られず、非常に丁寧な作りとなっています。また、平蒔絵（厚みを持たさない金泥での装飾）で土井家の表紋（藩主家としての紋）の「丸の内六本杓」が、正面に２つ、裏面に１つ施されています。善導寺には、この他にも土井家の所用品と伝わる道具類が伝わっています。

なお、盆に収められている「火入」「灰吹」「煙草入」「煙管」は、茶道具として後に入れ替えられたものです。

阿弥陀経写本　（時代　江戸時代）

阿弥陀経は『無量寿経』『観無量寿経』とともに法然が定めた「浄土三部経」（浄土宗の教え（教義）の根本）のひとつで、阿弥陀仏の実在や極楽浄土の様子、往生の方法などが書かれています。

巻末により、土井大野藩４代藩主・土井利貞が文化４年１１月５日（1807年１２月３日）に亡くなったことを受けて、翌年２月２日（旧暦）に冥福を祈るために長岡宗宅が奉納したことが分かります。

長岡宗宅とは、善導寺に維摩像（県指定文化財）を奉納した長岡柳宅家の分家（２代目）です。元は徒目付として藩士の取り締まりを担っていましたが、寛政１０年（1798）に藩医になりました。

なお宗宅は、この阿弥陀経を奉納した年（文化５年（1808））に病気のため亡くなっています。

伝 土井家旧蔵 硯箱　（時代　江戸時代）

全面に梨地蒔絵が施され、高盛蒔絵（金薄肉高蒔絵）や金貝で装飾されています。

梨地蒔絵とは、漆の上に金の地金を薄く細かくした「梨地粉」を蒔き、透漆を塗る技法です。酸化により徐々に飴色に発色します。表面が梨の表皮に似ていることからこの名前が付きました。

箱の表には中国風の建物と、蓬莱島と思われる島が高盛蒔絵で描かれています。箱裏には白・黒の２頭の牛が描かれています。「晴耕雨読」（晴天時は田畑を耕し、雨天時には読書をする。自然の流れに従い、心穏やかで自由気ままな生活）の「晴耕」を表していると思われ、硯が「雨読」として対になっているようです。

土井家旧蔵を示すものはありませんが、手の込んだつくりとなっています。

南無仏太子像　（時代　南北朝時代）

聖徳太子が２歳の時、「南無仏」と唱えたという故事（言い伝え）による像です。聖徳太子は日本に仏教を広めた聖人とされ、宗派を定めず信仰されてきました。

法隆寺（奈良県斑鳩町）に安置されている聖徳太子坐像（平安時代、国宝）は中が空になっており、観音菩薩像が納められています。これは、聖徳太子が観音菩薩の化身であることを表現しているようですが、観音菩薩は勢至菩薩とともに阿弥陀仏の脇侍を務める菩薩です。また、磯長（大阪府南河内郡）の聖徳太子廟で発見された「廟崛偈」（平安時代）には、「聖徳太子は救世観世音菩薩であり、衆生を救うために極楽浄土から来た。妻は勢至菩薩、母は阿弥陀仏である」と書かれ、この文は聖徳太子の作として伝わりました。このように聖徳太子信仰は、古くから浄土信仰と深くかかわっていました。

阿弥陀如来立像（胎内像）（複製）　（時代　鎌倉時代）（指定 県指定文化財）

善導寺本尊の「木造　阿弥陀如来坐像」（県指定文化財）の胎内に納められた金銅仏で、秘仏として３３年に一度開帳されます。（前回は令和３年４月に開帳）

「善光寺式阿弥陀如来（中尊)」と呼ばれる形式で、善光寺（長野県長野市）の秘仏・一光三尊の阿弥陀如来像に倣って作られ、高さも『善光寺由来記』（元禄５年（1692)）に記録されている「一尺五寸」とほぼ同じ、４７．７cm（約一尺五寸七分四厘）です。

仏像内に小さい仏像を納める理由はさまざまですが、善導寺のように外側の仏像と同じ仏像を納めるのは、内部の仏像を保護する、または、新しい仏像を本尊とすることとなった際に元の仏像を中に納めることが多いです。